

第8章 将来への展望

新大学に期待する

学 長 小 野 武 年

はじめに

平成17年5月25日、富山県内3国立大学法人を国立大学法人（新）富山大学とする国立大学法人法が公布されました。このことにより、平成17年10月1日に新しい富山大学が誕生致しました。この新大学の開設は、地域はもとより全国的にも大きな注目を集め期待されています。一口に新富山大学の誕生といいますが、その実現に幾多の困難がございました。富山医科薬科大学の各理事、監事、学長補佐はじめ数多くの教職員が日常の教育・研究・診療・事務・看護技術などの仕事と同時に、法人としての新しい運営方針を実行していくという想像を絶する激務に従事いたしました。そういった辛苦の中で法人化2か月後の6月には新富山大学の開設のための概算要求が行われたのです。その後、文部科学省や多くの関係各位の方々の温かいご配慮などを頂き、この10月1日の新富山大学が誕生したことには、労苦を共にして下さった方々に対する感謝の念と深い感慨を覚えます。お陰様で富山医科薬科大学の大学法人化の予算、人事や緊急を要する教育・研究・事務上の改革なども順調に進み、3大学統合による新富山大学の当面の運営に対する準備をすることができたと信じています。なお余談ではありますが、私が平成16年4月1日に文部科学省や関係各位へ学長就任挨拶のため上京した折に、多くの方からの大学改革等の現状と展望に関するお話をお伺いして、富山県内3大学の再編・統合が焦眉の急であるとの印象を受けました。これはすでに平成14年と15年に3大学の学長が再編・統合の合意書に署名されていたからに他なりません。この状況下で3大学の再編・統合を白紙に戻すことは不可能だと思われ、この上は何としても新富山大学の開学とその後数年間における基盤整備の確保に全力を尽くすしか選択の道はないという現状認識があったことを記しておかなければなりません。これまでの関係各位の骨身を惜しまないご尽力に対して深甚の謝意を表したいと思います。新富山大学においては、輝かしい未来を予見できる礎が築かれることを切に念じています。

新富山大学は、平成16年4月の法人化後に初めて、しかも3つの大学を統合することにより誕生いたしました。規模や求めるところが異なる異質の3つの大学が1つになること

の違和感や不自由さを乗り越えることができたのは、教職員はじめ関係各位の高い志、見識、努力の賜物であります。

新富山大学は8学部1研究所を擁し、学生数だけでも8,000名を遥かに超える規模であります。学生数のみから言えば、金沢大学や新潟大学を凌ぐ日本海側最大の総合大学であります。しかも今、生まれたばかりの新大学はあたかも生まれたばかりの大星雲にも似て未だ外形定かならず、内実も確固としているわけではありません。かねてより私は新大学の発足にあたり「和」の重要性を訴えてきました。この「和」は日本人が古来より美德とし、また、国内外の名実ともに立派な企業の偉大な創業者の方々が例外なく強調されており、「人間として何が正しいか判断する」「公正、公平、誠意、正義、勇気、愛情、謙虚な心」を大切にすることから生まれるものであります。もし我々が、日本人が古来より美德としてきた「和」を忘れるようなことがあれば、この新星は混乱や自滅の運命を辿ることにもなりかねません。新大学の学長をはじめとする役員会、経営協議会、教育研究評議会はまず、無私立場での議論や三大学統合合意書の確認事項を念頭に入れ、「和」をもって新大学の連携・管理・運営に全力を傾注し、大学の本務である知の創造、知の継承と地域・社会への寄与に努めて頂くことを何よりも期待しています。

従来の国立大学では管理や運営といった、上下関係的もしくは縦割りの色彩の強い要素が中心にありました。しかし法人化された新大学ではむしろ並列関係にある支援や連携といった要素を加えるべきであると私は考えております。例えば学生－教員関係を指導という立場からよりも支援という立場から見ることがあります。また異なった学部間の関係、さらには予算の効率的配分や活用などにおいてもこの支援と連携という要素が重要な位置を占めるでありましょう。それによっではじめて不定形的な星雲に明確な外形が与えられ、内へ向かう求心力が働き、星雲そのものが辿るべき軌道が定まるものと私は考えております。

1) 教育について

現在進行中の教育改革は、100年に一度あるかないかの規模と多様性を内包した制度改革であります。国家予算における国立大学・研究所等の運営費の比率は、これまで毎年一定の水準が維持されてきました。この間、全国の国立大学は安定した予算配分による護送船団的な教育を国民に提供してきましたが、今後は、必要性や評価に基づいた予算の傾斜配分や重点配分により各大学は教育の質の高さや独自性を競うことになってきます。このような時期にあって、最も大切なことは、英知を結集して新大学の特色を鮮明にすること

であります。

生命科学に関係する分野では、大学で学ぶべき情報量が過去20年間で10倍に達したと言われています。人文社会科学でも新学問分野が續々と創造されています。これらを従来型の教育方法ではカバーすることは難しく、問題発見・解決型教育を導入しなければなりません。さらに、教養教育や様々な体験学習を通して、他者と喜びや悲しみなどを共感できる感性豊かな人材を養成しなければならないと思います。これらの着実な遂行には、1) 教養教育の見直し及び再構築、2) 新大学教員の教育研修（ファカルティー・デベロップメント）、3) 学生に対する授業評価アンケート結果に基づく授業改革、4) 教員の情熱と努力、教育業績の適切な評価とインセンティブの導入、5) 任期制を活用した優秀な真に国際レベルの教員の確保、6) 寄附講座の設置や産学連携による人員や財源の確保、7) 欧米の一流大学との単位互換による国際的な教育、8) 国際的評価の高い教授による講義や地域の有識者、大学のOBによる特別講義等が必要であります。しかし、もう一方で、大学教育の要諦は教えるというよりも学ぶことを支援することが大切であると考えます。

入学試験は将来を担う人材の確保という意味から、大学の最重要事項の一つであります。新大学では、アドミッションセンターを設置して入学者選抜方法の改善等に積極的に取り組むことが望まれます。また薬学教育の6年制移行に伴う入試、教育などについても慎重に対応しなければなりません。

新大学の1つの目玉として、平成18年4月から生命科学を中心とした医薬理工融合型教育・研究拠点形成を目指す国際水準の大学院が新設されます。この医薬理工融合型新大学院の創設も昨年（平成17年）4月からの担当理事、学長補佐、経験豊富な事務局の英知と日夜を分かたぬ取り組みがなかったら実現できなかったのではないかと考えています。皆様の努力にはただ頭が下がります。

また、新大学は芸術文化学部と教員養成機能をもつ人間発達科学部を備えているのも特筆すべきことであります。これらの特色をもつ新大学では、高度の知識や技術を身につけた医師、薬剤師、看護師、理工、芸術文化や人文社会分野の第一線で活躍できる人材、さらには先端的な研究や教育を担う人材を育成することで、地域に根ざした世界に誇れる教育や学問を通して地域と国際貢献に寄与し、新大学の個性を鮮明にする必要があります。しかし、「世界を知って地域を考える」ことを忘れてはなりません。最近、「地域に根ざして、世界に誇れる」という歌い文句をあまりにも頻繁に耳にしますが、「井の中の蛙」に

ならないようにして頂きたいものです。世界は広いのです。自分だけが新しいことをしていると思い込んでいると、世界のどこかですでに同じようなことをやっている場合が必ずといってよいほどあるものです。同じことは国際的とか、世界的とかいうときにもいえません。地域とは何か、世界とは何か、とくに世界的という場合には、このことを十分に心しておくことが肝要だと思います。何はともあれ、高岡短期大学では、すでに文部科学省の特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）として採択されている「ものづくりを支える大学教育支援プログラム」や「学内を学生作品で埋め尽くそうプロジェクト」、現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）で採択されている「炉辺談議方式による地場産業活性化事業」の成果も大いに期待されます。

2) 研究について

21世紀に入った今日、我が国では社会の少子高齢化が急速に進み、2080年には総人口が6,500万人に半減する見通しであります。これらの要因に加え、環境汚染や地球温暖化など地域環境の悪化、耐性菌・新型ウイルスなどの出現、さらには産業界におけるグローバルコンペティション化などが進行しています。このような状況下にある現在、日本社会の持続的な活力の維持・発展のためには、広く国内外から優秀な人材を集め、人類福祉の向上に貢献するとともに地域や産業界を含めた多様な要請に柔軟に対応できる教育・研究組織を整備し、次世代を担う創造性豊かな優れた人材育成と先見性に富んだ研究を促進することが強く望まれます。

21世紀の我が国の科学技術基本計画には5つの重要課題があげられていますが、新大学ではライフサイエンスに対する対応が特に重要になると考えられます。積極的に推進すべきライフサイエンスの分野には、ポストゲノム研究、脳研究、免疫・感染症研究、再生医療、食糧・環境問題、分子イメージングなどがあります。ライフサイエンスと同様の科学技術推進の重要領域として、ナノテク・材料、情報通信、環境などの領域が考えられます。幸いにも新大学は、これらの領域とほとんど関係しており、このような変革の時代に国民の福祉向上、生命科学や科学技術革新の新たな飛躍を目指すべきであると考えます。

とくに新大学においては、全国的にも珍しい医、薬、理、工、芸術文化、人間発達や和漢薬の研究者が連携して教育・研究を推進できる環境にあり、これらの学際的な連携により、上記のような重要な諸領域、東西統合医療および生命・情報システム等の研究、さらには人文学、社会学、経済学、教育学でも新しい学問分野の創造を推進していくべきであります。国内外でも高く評価されている和漢医薬学総合研究所、極東地域研究センター及

び水素同位体科学研究センターにおける特色ある研究もさらに発展・充実しなければなりません。

幸いにも新大学では、文部科学省の21世紀 COE プログラム課題「東洋の知に立脚した個の医療の創生」や知的クラスター事業「とやま医薬バイオクラスター」、さらに科学技術振興機構（JST）の戦略的創造研究推進事業（CREST）の「情動発達とその障害発症機構の解明」などの大型プロジェクトが採択されており、順調に成果をあげています。法人化後の新大学経営に不可欠な競争的資金の獲得に一層の努力をしなければならないと思います。

3) 地域貢献等について

地域貢献につきましては、長い歴史と実績を持つ五福キャンパスの地域共同研究センターやベンチャーラボ、高岡短期大学の大学開放センターなどの益々の活躍が期待されます。杉谷キャンパスでは、新大学附属病院が富山県における「最後の砦」として先端医療と高度医療を備えた医療機関の役割を果たせるよう改革を進めていくことが重要であります。このためには、病院の人的・物的資源の有効活用、病棟整備、再生医療などの次世代の医療技術の開発・実用化・導入などが必要であります。また、地域（地元医師会）との連携を重視し、地域からの要望の強い救急医療とプライマリー医療を充実させることが急務であります。

一方、富山県の薬業産業における伝統を活かし、産学官連携による新薬の開発から臨床治験までを総合的に実施できる創薬・治験センターを強化すべきであると考えます。この構想には、新大学が誇る和漢医薬を含めることが必要であります。薬学の分野では、県内の大学、企業、行政機関が連携して創薬研究を推進するための組織であるフォーラム富山「創薬」を拠点として、共同研究プロジェクトを育成・支援し、県内製薬会社の研究員が大学で研究できる環境を整備して、有能な人材の育成に貢献していくことが大学の重要な使命であると思います。

4) 管理運営について

新大学は設立理念や歴史の異なる3つのキャンパスに8学部、1研究所を有しております。当然、運営上多くの問題が出てくることが予想されます。個々の問題はともかくとして、まず役員会を中心とした管理・運営体制を整備することが急務であります。また、いかに大学全体の多様な意見を吸い上げ、そして学長のリーダーシップを確立していくかも二律背反の難題であります。学長補佐体制の確立、人件費管理、評価に関する組織、企画

戦略会議室などを整備し、これらと役員会、経営協議会、教育研究評議会の審議を通して、明確な目標設定と意思決定を行わなければなりません。そのプロセスで要求されているのは3つのキーワード、「迅速さ」「情報の開示」および「責任の明確化」であろうと考えます。いずれのキーワードも実行するとなると大変に難しい問題を含んでいるのでありますが、学長はじめ大学の全教職員が新大学の未来のために、人のため、世のためという人間として最高の心と「和」のフィロソフィーをもって取り組んで頂くことを切に祈念しています。

最後に法人化後の最初でしかも3大学統合にこれまで微力ながらも全力を尽してきた富山医科薬科大学の一人としても、大学の将来への明るい展望が開かれることを期待して止みません。